深　海　魚

イノル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
深　海　魚

【Ｎコード】
Ｎ７８０２Ｓ

【作者名】
イノル

【あらすじ】
私は毎晩のように夢をみる。

何度も、何度も同じ夢をみる。
これは夢なのだろうか。
もう、これは現実なのだろうか。

まるで私は夢の中を泳ぐ深海魚みたい。

そんな私に知らない男性が声をかける。
貴方は誰。
これも夢？
……ここは、何処……？

1　夢のはじまり

1

ただ、走っていた。

真っ暗な場所を。

いや、違う。暗闇の中目を凝らすと、様々な色をしたコンテナが所狭しと置いてあるのが見えた。まるで、小さな時遊んだブロックの様に。

そして私は逃げている。

何から逃げているのかは、わからない。

ただ、追いつかれてはいけないということだけはわかっていた。逃げなければ。早く。

そんな必死な私の手をひく人物がいた。一生懸命、目を凝らしてみても誰なのか見えない。

走って、走って……。

暗闇と同化したような大きなモノが私を捕まえようとする所で……、

目が覚めるのだ。

そんな夢を、よく　見る。

その日も、この夢を見て、目が覚めた。

薫は深いため息をひとつついて、布団の中で少し、まどろんだ。
この夢の後は、けだるい疲れが残るのだ。夢なのに。なかなか身体がいう事をきかない。眠って疲れを取るということはあっても、逆に疲れてしまうというのは一体なんなのだろう。と、ぐったりとしながら考える。

ああ、またこの夢か。と思っていた。

汗で身体が冷えている。布団を改めて被り、冷えを暖めなおした。ベットの上でしばらく身体をあずけていると、夢の影響での激しい鼓動がようやく収まってきた。
「夢なのに、疲れるのだけは止めてほしいよね」
薫は苦笑いを浮かべながらいう事を聞かない身体を無理矢理起こして、朝の準備を始めた。

薫は大学の二年生。親元を離れ、一人暮らしをしている。
肩までの髪の毛に手入れをして、軽い化粧をほどこす、ラフな衣類に身を包み、いつものように家を出た。大学は家から電車で三駅先にある。
ホームで電車を待っている間、今日の夢の事を考えてみる。
この夢は幼い時から何度も繰り返し見てきた。友だちや、母に話すと、いつも「疲れているんだよ」とか「私も勉強とかで追い込まれたりしたら見るよ」などの答えが返ってはくる。だけど、そういうものとは、何か違う気がする。
「トラウマとかあるんじゃない？」
そんな事も言われた。確かに人は何かしらトラウマを抱えて生きていると思う。
私のトラウマ……、幼い頃「鬼ごっこ」が異常に恐怖だったのは

覚えている。でもそれはこの夢を見るようになってからの様な気もするのだが……。

考え込むあまり、ホームに電車が到着したのを薫は気付かなかった。そして、その電車から降りてきた人と思わず肩が当たってしまった。

「あ、ごめんなさい」

下を向き、考えていた頭を持ち上げて振り返った。そこにいたのは、自分と同じ歳くらいの男の人だった。今、薫もしているだろう、けだるい目と合う。

彼は薫に一瞥くれると、改札の方に向かって行った。

あの人も嫌な夢でも見たのかな？　なんて思いつつ、薫はその到着した電車に乗り込んだ。

電車の外に見えるのは桜並木。

薫は桜が嫌いだった。いや、嫌いというか綺麗すぎて恐いのだ。

これもトラウマかな？　と、ふと考えてみた。そうそうトラウマと仮定するのもどうかと思う。薫は苦笑いをしながら、綺麗すぎて恐い桜並木から目をそらす事ができずに、走り行く電車から小さくなっていく木々を眺めていった。

2

その夜、また夢を見た。

最近、特に多くなっている気がする。ただ、いつもと違ったのは、なにかが舞っている。白い何か。炎の灰のようであったり、まるで花びらの様であったり。

そしていつものように何かに捕まりそうになったとき――――。

「飛べっ！！」
男の人の声が聞こえた。
何！？　と考える暇が無かった。目の前がいつの間にか崖になっている。まるでここが夢の境界線のようにすっぱりと切り取られている。
男の人の影が見える。その影は薫の手を掴みながら境界線を飛び越えるように宙に舞った。薫はバランスを崩しながらも、同じようにジャンプする。

けど、ここ、向こう岸が無いじゃない――――
落下する感覚を感じながら、目の前が真っ白になっていった。

「……いい加減、目を開いたらどうだ？」
男の人の声で、我にかえり、薫は周りを見渡した。

此処は、どこ？

オンボロのビルの中のようだ。六帖くらいの広さの建物の中。壁は薄汚れていて、茶薄色をしていた。床もパネルが所々剥がれている。部屋の奥に窓が一つだけあり、そこから薄明かりが差し込んでいた。その前に、またもやすり切れたソファがあり、そこに男性がどかりと態度悪く座っていた。
薫はその向かいのソファに座っていた。
いつの間にソファに座っていたのだろう、いや、その前にこんな所は知らない。
夢の続きにしては目の前の男性は誰？
頭が混乱している。夢だとしても、過去に知っている場所とかじゃないとこんなにはっきりとした風景は現れないんじゃないのか？

「夢……の中、だよね？」
やっと紡ぎだした一言がこれだった。
「そう、あんたの夢の中。ただし、俺の夢の中でもある」
理解不能な答えが返ってきた。その彼は薫の理解しきれていない表情を察したように次の言葉を繋げた。
「脳は共鳴するんだよ。親子が同じ夢を見る事があるとか勉強しなかったのかい。心理学をお勉強中のおばかさん」
むかっとした。
何この人。睨みつけてみたが、けだるそうな目がバカにしたように返してくるだけだ。
くせのある髪の毛が光に当たって黒光りをしている。くせというか、クルクルの天然パーマだ。切れ長の大きな目、目鼻立ちが整った顔。シャツにジーンズというラフな出で立ちだが……。はっきりいって男前の部類にはいるだろう。
だけど、それを台無しにするくらいの、けだるそうな態度と、口の悪さ。
こんな人は知らない。

……知らない？

「あー！今日電車でぶつかった男の人！！」
合点がいった。なんだ、今日会った人だったんだ。それなら無意識で覚えているはずだ。で、勝手に自分で想像してこんな人を作り上げちゃったんだ。それならもっと優しい人を連想すれば良かった。
一人で納得している薫に、バカにした口調のまま彼は言い放った。
「勝手に誤解してくれてもいいんだけどね、残念ながら実際会っても俺は優しくはないだろうな。ちなみに続きを言わせてもらうと「此処」はあんたの夢の中と、俺の夢の中の境界線。いわゆる『狭間』ってやつかな。あんたのいつもの夢から逃げ出せるのはここが精一杯ってやつだ」

そして、づいっと指で薫を指すと、鋭い目を細くして言った。
「いい加減、あの夢から解放されないと、とんでもない事が起こる。これは警告」
理解しきれない薫に彼は言った。
「どうしても信じられないんだったら、明日、高松町の空き地に夕方来い。いいな」
そう言うと彼は立ち上がってその部屋から出て行った。

一体なんだというのか。言うだけ言って、何処かへ去っていってしまった。

すると、彼が居なくなると同時に上からゆっくりと白い靄が降りてきて薫を包んでいった。

2　これも夢なのだろうか

1

本当に高松町には空き地があった。

あまりにもリアリティーがありすぎる夢から覚めた薫は半信半疑ながらも、その足を踏み入れた事の無い土地に奇妙な懐かしさを抱いた。いや、懐かしいというのは正しくない。此処に来るべくして来た、その諦めに似た感慨がそう感じさせたのだろう。そう自分自身を笑った。

夢の中の人物に場所指定されるなんて……。

興味半分、そんな事あるはずが無いという気持ち半分のはずだったのに……。

住宅地にぽっかりと空いたその空間はまるで時間が止まっているかのようだった。ただ、時間が流れているという微かな証拠として端には大きな桜の木が花を静かに咲かせていた。

薫は吸い寄せられるように、桜の木の前に立った。

その木は大半が焼けこげていて、まるで枯れ木のようだ。しかし、根がよほど強かったのか、1／3ほど焼けるのを免れた枝が力強く花を咲かしている。

「遅いじゃないか」

桜の後ろから声が聞こえた。

はっと我に返って薫は声のする方にまわった。そこには桜の木を背もたれにし、座り込んで、今まで眠っていたかのような彼がいた。

確かに彼だ。
夢の中に出てきた彼。
夢の中と一緒で、クルクルの髪にけだるそうな目。よく伸びた手足。
彼は思いっきり伸びをすると、やはり面倒くさそうに立ち上がった。
「おバカはたどり着けないかと思ったよ」
立ち上がって面と向かうと、彼はかなり長身のようだ。薫は顔を上に向けないと目が合わない。私でも標準くらいはあるのに。
「だって時間指定してないじゃない。夕方だけじゃわかんないよ。それにおバカって止めてよ。私にはちゃんと名前があるんだから。二宮薫って名前が」
「知ってるよ」
彼がニッと笑いながら答えた。
「ど、どうゆうこと？　それに昨日、私が心理学専攻してるのどうして知っているのよ」
動揺した。まさか夢で全部がわかるって言うんじゃないでしょうね。
そうなると、プライベートも何もあったもんじゃない。
「大学で一緒だ」
予想外の答えがかえってきた。あ、そういうこと……。
「ともかく、夢での会話は全て納得できただろ？　あの狭間まで連れて行くのがどれだけ大変だったか。あんた足が遅いからなぁ」
「しかたないじゃない。夢だったんだもの。水の中みたいで前に進まなかったんだから……」
まるで現実でそうだったからかのように、もじもじした。夢の中を知られているのがこんなに恥ずかしいとは思いもしなかった。
薫のそんな姿を見て、彼はまたにやっと笑う。そして桜を見上げた。
なんだか切なげな目をして桜を見上げている。

どうしてそんな目をしているんだろう。

そして、薫の方に向き直る。

「これで、俺とあんたが夢でシンクロしている事がわかっただろ？」

「確かに……信じる……」

疑いようが無かった。違うといっても、夢の通りに彼はここにいる。

「でも、どうしてそんな事ができるのかな。私たち、一回すれ違っただけで会話したこともないし。……もしかして、昨日だけじゃないの？　シンクロしていたっていうのは」

あの夢では毎回誰かに手を引かれていた。もしかして、彼が？

彼は少し苦笑いをして腕を組む。

「俺が夢の狭間にいるとき、いつもあんたの逃げる姿が見えていた。あんまりにも必死だったからな。しかたなくだよ」

いじわるそうに言った。けど、これは照れ隠しなのかもしれない。なんとなく、思った。

だってそうじゃないと毎回手を引いてくれてるはずないじゃない。

彼は急に真顔になると、薫に不吉な事を言った。

「最近、あの夢が増えている。気をつけろ。身に危険が迫っている可能性がある」

ぞっと寒気が走る。初めて会った人にこんなことを言われるなんて。

「今日、言いたかったのはそれだけだ」

もっと聞きたい事がいっぱいあるのだが、なんだか訳がわからなくて言葉にならない。狐につままれているような気分。しかたなく薫はこくんと頷いた。

彼はまた桜を見ている。薫もつられて、力一杯咲いている桜を見上げた。

桜の向こうで夕日が燃えているようだ。その陽に照らされて桜も

燃えているようにも見える。
頭の奥がズキリと痛んだ。
「いたっ……」
目がチカチカする。こんな風景、私、見た事がある？
「大丈夫か？」
無愛想だった彼がふいに薫の顔に近づいてきた。
ドキッとした。そんなキレイな顔、近づけないでよ。
「うん、だ、大丈夫」
急に胸がドキドキしてしまって、頭の痛みが吹っ飛んでしまった。
彼は何事かと思ったようだが、ふうんという顔をすると、「じゃあな」と言って歩いて行ってしまった。
薫は慌てた。肝心な事、私、聞いてないよ。
「ちょ、ちょっと待ってよ。私、あなたの名前知らないんだけど！」
彼は立ち止まり振り返りながら、なぜか嫌そうに言った。
「俺は槙野。……槙野カヲル」
そして、そのまま姿を消してしまった。

2

家に帰った薫は脱力してベットに倒れ込んだ。
何がなんだかよくわからない。

夢がシンクロ？
それって誰にでも起こりえる事なの？
夢の意味は？
そして、危険が迫っているってどういうこと？

「ああ、もう、よくわからない！」

枕に頭を突っ伏した。
じゃあ、夢を見たら、毎回あの彼が現れるのだろうか。見た目はすごくかっこいいけど、口が悪く、態度も悪い。いいような、悪いような……。
なんか、不思議な雰囲気の彼だった。近寄りがたい、人と壁を作っている感じがした。薫も今回の事がなければ、早々話しかけたりできなかっただろう。
同じ大学って言っていたよね……。明日、人事課に行って探してみようか。
そこまで考えると、ふと違う疑問が頭をかすめた。
携帯を取り出し、電話をかける。
コールが鳴る。
七度目のコールの時、電話が通じた。
「あ、お母さん？」
『どうしたの、急に？』
のんびりした口調の母が出た。相変わらずだな。メールはよくしているが、電話をしたのは久しぶりだ。ほんわかした雰囲気の母の声にぐるぐる回っていた頭が落ち着きを取り戻した。
「ねぇ私、高松町なんて居た事無いよね？」
薫の疑問はそれだった。初めての土地のはずなのに、すんなりとあの空き地に辿り着いた。今考えると不思議だったのだ。
『どこ？　そこって。私に町名、言われてもわかんないわよ』
能天気な声が返ってくる。そうだ。母は名前を覚えるのが苦手だったんだ……。
『それよりも、今タカおじさんが来ているのよ。仲良かったよね。かわるわね』
話がころころ変わるのも母の特徴だった。人の疑問をそれよりも扱いをして、この母は、まったくもう。
だけども、タカおじさんというのは幼い時からよく家に遊びに来てくれて、私もとても懐いていた。　まだ四十代のおじさんはまる

で私を妹のように可愛がってくれた。もしかしたら母と違って覚えているかもしれない。
『もしもし、薫ちゃん？　久しぶりだねぇ』
朗らかな声が聞こえてくる。懐かしいな。
「タカおじさん元気？　最近会ってなかったから寂しいよ」
『じゃあ、今度デートでもするかい？』
笑い声と共に冗談が返ってきた。元気そうだ。薫はさっきの疑問をもう一度聞いてみた。
「私、高松町って住んでいたことないよね？」
しばしの沈黙。今、考えているのだろうか。
『うーん、俺の記憶ではそこに住んでいたって事は知らないなぁ。そこ、桜の名所だろ？　それで何度か行った事あるんじゃないかなあ』
なるほど。それなら多少の地理は覚えているかもしれない。通りすがりにあの空き地を見たのかも。
『そんな様子じゃ、まだ彼氏なんか捕まえてなさそうだな。薫ちゃんは可愛いんだから早く見つけろよー』
「そんな事言ってくれるのはタカおじさんだけだよ。ありがとう、また電話するね」
そう言って電話を切った。
やっぱり母の声を聞くと落ち着く。お母さんの声に元気をもらった。懐かしいタカおじさんの声まで聞くとは予想もしてなかったけれど、お母さんに、タカおじさん。二人のおかげで今日は変な夢を見なくてすみそうだ。
薫は携帯をベットの脇に置いて立ち上がった。
さあ、難しい事は考えるのを止めて、ゆっくりお風呂にでもはいろう。

2　これも夢なのだろうか

3

講義が終わった後、薫は人事課へ行って「槙野カヲル」とやらを探してみた。
私と同じ名前のあいつ。
「あ、あった」
確かにこの大学には「槙野カヲル」はいた。
私より一歳年上の法学部……。あんな夢がどうとか、こうとか言っていた人物が法学部とは想像もつかなかった。
もう夕方だが、もしかしたらこの構内のどこかにいるかもしれない。
探してみよう。

薫は食堂や講義室を急ぎ足で見て回った。
どこにもいない。
やはり、帰ってしまったのかと思いながら図書室をぐるりと回ったあと、何気に図書室の中にある　準備室に目が止まる。
……そんなはず、ないよね。
そっと扉を開けてみる。
薄暗く、ひんやりとした室内。ここはなんとなく『狭間』のあの部屋に似ている。
その奥で、机に足を放りだして腕組みをしながら眠っている彼を見つけた。読みかけらしき本がアイマスクがわりに顔の上に乗っている。いや、そんなことをしなくても、ここは十分薄暗いと思うのだが……。
なんとなく探してみようという気でここに来たのだが、実際会ってしまうとどうすればいいのかわからなくなってしまった。

とりあえず今まで言いくるめられていた自分を思い出したら、ムカついてきたので、窓にかかっていたカーテンを開き、部屋を思いっきり明るくしてから顔の上にある本を取り上げた。
「うわっ！」
夕日が直接、彼の顔にかかる。ざまあみろ。
「…せっかく熟睡してたのに、なにするんだ……」
眠そうな、というか、寝ていた声で彼は言い、思いっきり伸びをした。
「ここは学生立ち入り禁止でしょ。なにやってんの」
「俺はいいんだよ……」
まだ眠そうだ。そこらへんの本を手探りで探している。まだ寝る気だな。その本をまた取り上げて、薫はもう一つのイスに腰掛けた。
「何がいいのよ。早く出ないと怒られるよ」
「俺は図書室の管理のバイトをしてる」
あ、そうなんだ……。それにしても寝ているのでは管理にならないんじゃないのかな。
「俺の唯一の安らぎの場所をどっから探してきたんだ。夢の中だけじゃなく現実でもややこしい奴だな」
カヲルは諦めたように、イスに座り直し（といっても机の上の足はそのままだけど）やっぱりけだるそうな目でこっちを見た。
「あ、あのさ、槙野くんがシンクロできるって私だけ？」
突拍子も無い事を自分でも言ったな。と思った。けど、カヲルは急に真顔になって、ふいと顔を上にあげた。
「触れた相手は大概シンクロできる。それどころか、触れた途端考えている事も頭の中に流れ込んでくる」
そして机の上の足を床に降ろし、こっちを見た。
「気持ち悪いだろ」
ニヤッと笑った。だけど、本当の笑いではなかった。目が笑ってない。
「小さい頃から本当に何でも頭に入ってくるんだよ。考えてる事を

言い当てられる。恐い。気持ち悪い。どうして夢を知っているんだ……」
幼い頃の記憶を思い出しているのだろう、彼の人との壁はこれだったんだ……。
「ま、今はコントロールできるようになったからね。触れたとしても全て遮断しているよ」
そしてまた笑う。
笑い事ではない。プラスの面だけではない、マイナスの思考まで入ってくるなんて。それも触れる事で流れ込んでくるなんて。なんて辛い事なんだろう。
カヲルはにやりと口角を上げていたが、急に表情が険しくなる。眉間に皺を寄せて……。
「なんでおまえが泣くんだ」
知らずに涙が流れていた。
何故、涙が出るのだろう。まるで自分が実体験していたかのように鼻につんっときた。どうして、私は泣いているの？
「ごめんなさい」
それしか言う事ができなかった。ごしごしと目を擦り、慌てて涙を拭く。
カヲルは頭をボリボリ掻きながら足を組んだ。
「あんたが泣く事じゃない。それに俺は……」
途中で言葉が途切れた。
「コントロールできるようになったって言ったろ。俺が泣かせたみたいになったじゃねーか。さっさと泣き止め」
「う、うん」
薫は急ぎ涙を擦りながら顔を上げた。カヲルは気まずそうな顔をしている。
「帰るぞ」
カヲルは立ち上がると図書室の鍵を引っ張り出してきて、薫に投げつけた。

「鍵、ちゃんと閉めろよ」
そう言ってさっさと出て行ってしまった。
え、私、鍵片付ける場所知らないんだけど。
慌てて顔を振って自分の頭の中を整理し、準備室の鍵を閉め、カヲルの後を追いかけた。

4

「……ねぇ…」
大学からの帰り道だ。電車から降り、家へ向かっている。
「ねぇってば」
目の前を歩いている人物に、薫はひたすら話しかけている。だが、向こうは全くの無視のようだ。そんなに熟睡していた所を起こされたのを怒っているのだろうか。しかし、このまま行くと家に着いてしまう。
しかたない。
薫は後ろから思いっきり体当たりをした。よろめいたカヲルがやっと振り向く。
「っ痛ってーな。別にあんたの家なんかに行こうなんて思ってねーよ。俺も家がこっちなだけだろ」
「それでも、答えてくれてもいいじゃない」
無視とは腹が立つ。薫はむくれるとカヲルの先をスタスタと歩き出した。
「まったく……考え事してたんだよ。別に起こされて怒っていたわけじゃない…」
そう言うと、しまったという表情をした。読んでしまった。という顔だ。
「別にいいけどね。考えてた事読まれたって。たいした事考えてないもん」
さらに薫は歩き出す。

「全く、この女は……」
というカヲルのつぶやきは聞こえていなかったようだ。

その二人を遠くから眺めていた人物がいた。
少し距離を置き、同じペースで歩いて行く。
二人は人通りの少ない所で別れるようだ。女の方へと足を向ける。
そして彼女がマンションへ入っていく所を見計らって、その人物は行動に出た。
薫はマンションへの鍵を開けようとしていた時だった。
突然後ろから口を押さえられた。暴れようとして後ろを向く。ナイフが見えた。
頭の奥がチカチカする。
こんなの、前に見た――――――――。

ナイフが振りかざされた。

私、殺される？

時間が止まった。
いや、ナイフの動きが止まっていた。
「おっさん、何やってるんだよ」
この声は……
槙野くん？

ナイフを押さえていたのはカヲルだった。
男と揉み合いになる。狭いロビーの中、乱闘になる。男は諦めるつもりがないようだ。力まかせに暴れていた。いくらカヲルが運動神経がよくてもこの狭い空間ではナイフの方が確実に有利だ。
そしてカヲルの腹に、ナイフは滑り込まれた。

カヲルの力が抜けた瞬間、男は振り向きざま薫の頭部を壁に強打させた。

薫は見た、その時、その男の顔を。

あれは――――――――――――――――――――。

目の前が真っ暗になった。

3　夢のなかの夢

1

沈んでいく。
深く、深く。

さらに深く。
ゆらゆらと深い藍の世界で薫の身体は漂っている。
まるで、魚のようだ。深海魚のよう。
心地よいゆれの中へ沈みこんでいく。

ああ、私、死んだのかな……。

こんな気持ちがいいところだったら、このまま漂っていようか。
うっすら目覚めた意識の中、薫は沈みゆく身体の流れに身をまかせ、沈んでいく。
このまま沈んでいったらどうなるんだろう？

ああ、お母さん、ごめんね。
私きっとこのまま死んでしまうんだ。
脳裏に母の顔が浮かんだ。泣いている。

泣いている。

おかあさん、なかないで……。
藍の世界に母の泣いている姿が映し出された。
その姿は、今の母ではない。もっと若い。
薫は手を伸ばした。おかあさん、なかないで……。

伸ばした手はなぜか幼い子供の手をしていた。
母はその手に気付き、母も手を差し出してきた。
そして、掴む。

だが、その手は母の手ではなかった。男の人の手だ。急に力が込められた手が薫の手を包み込んでいた。
「やっと、見つけた」
藍の世界の母は急に霧散し、姿を現したのはカヲルだった。カヲルが薫の手をしっかり握りしめている。
「大丈夫だ。このまま沈んでいくぞ」

ゆらゆらと、二人。深い藍の世界に沈みこんでいった。

2

頬を叩く感覚で目が覚めた。
カヲルが自分の膝の上に薫の頭を乗せ、頬を叩いていたのだ。
「あ、槙野くん……？」
「やっと覚めたか。おまえって奴は人が助けてやったっていうのに、頭強打されやがって。助けた意味がないだろ」
そう言うと、頬を叩くのを止めた。
そうだ！　槙野くんは私をかばって刺されたんじゃ……。
「俺は大丈夫だ。刺されたといっても致命傷ってほどじゃないし、あの後、警察と救急車を呼ぶくらいの元気はあった。ただ、犯人には逃げられたがな」
ため息をついて、もう一度頬を叩く。
「そろそろ頭どけてくれないかな。夢の中とはいえ、俺の足も痺れ

てきた」
　その言葉に薫は自分の状況に気がつき、顔を真っ赤にして起き上がった。

「ホント、どんくさくってスミマセン……」
　薫が正座をして頭を下げる。カヲルはいつもの笑いを浮かべた。人をバカにした笑い。だけど文句なんて言えません。助けてもらったのに頭を強打するなんて……。
「まったく、本当だよな。散々忠告してやっていたのに、この有様だよ。俺までこっちに来るハメになるとはね」
　薫は周りを見渡す。何も無い、ただ蒼い草原だけが広がっている。上を見上げると、さっきの深い藍が空のように覆っていた。
「ここはあんたの深層心理と呼ばれる場所。夢よりも深い底。俺もここまで深い所に来た事はないな」
　一緒に上を見上げていたカヲルは、薫に向き直り、現実の状況を説明した。
　薫を襲った犯人は、あの後すぐカヲルを押しのけ逃げていった。刺されても意識があったカヲルは携帯で警察と救急車を呼び、警察に状況を話し、一緒に救急車に乗った。薫は頭を強く打った為にずっと意識が無く、昏睡の状態なのだそうだ。
「普通の脳震とうならすぐ目が覚めるんだろうが……無理だろうな」
「どうして……？」
　何とも言えない不安が薫の心をよぎる。
「心が『此処』にいる。自分で上に登れるのなら話は別だが、あんたはその術を知らない。」
　そして少し考え込んだカヲルは、ゆっくりと次の言葉を発した。
「俺に考えがあるんだが……。犯人は通り魔じゃなく、確実にあん

たを狙った確信犯だ」
　どうしてわかるの？　と言いたげな薫の表情を察し、カヲルは続けた。
「奴の腕を掴んだ。俺に聞こえてきた声は、『とにかく始末しなければ』と言っていた。犯人はあんたを知っている。あんたは奴の”何か”を知っているんだろうな。あんな行動を取らせる何かを。それを突きとめる。記憶を取り戻すんだ。おそらく、いい記憶じゃないだろう。それでもできるか？」
　記憶を取り戻す事ができたら、そのショックで現実に戻れるかもしれない。そうカヲルは言った。　ショック療法とはなんとも荒っぽい。
「そんな事で現実に戻れるの？」
「俺の勘だ」
　カヲルはにっと笑った。成り行きとはいえ、彼はこんな所まで助けに来てくれた。薫は此処でも笑える、その笑みに賭けてみようと思った。

　だって、自分一人じゃ結局何も出来ないのだから。

　そう心に決めた途端、何も無かった草原に重厚な扉が姿を現した。
　心の中なのだ扉を作るのは造作もないことだ。
「この扉の向こうに眠っている記憶があるわけね……」
　ごくりと唾を飲み込んだ。カヲルは余裕な笑みでその扉を眺めている。
　扉のノブを固く握りしめ、薫は彼の目を見て言った。
「どうして、助けてくれるの？」
　勇気を与えるかのようにカヲルも薫の手を覆うようにノブに手をかけた。
「あー。ま、成り行きだよ」

二人は笑った。初めて一緒に笑った。
私の記憶……、恐い事は何も無い。大丈夫。それに独りじゃない。彼もいてくれる。
「じゃあ開くぞ」
手に力をかけ、二人は重厚な取手を回す。
扉が開いた。

3

扉を開くとそこには異次元が広がっていた――――――
と、いうわけでは無く。
人々の声。自転車の行き交う音、車が走っている。遠くで電車のガタンゴトンという音が聞こえる。　目を開くとバスのロータリーが見えた。
ここは……。
実家のある駅だ。
薫が高校まで住んでいた街。
その駅前に薫とカヲルは立っていた。
後ろを振り向くと、毎日の様に入り浸っていたコンビニがある。そのコンビニから今、買い物をして出てきたかのように二人は立っている。横をみると併設されたファストフード店があり、いつものような賑わいを見せている。間違いない。ここは私が生まれ住んだ街だ。
薫は感心した。いつも流し見で眺めていた風景が、全く、見事に再現されていたのだから。潜在意識とはいえ驚きだ。

駅前なので乗り捨てられた自転車がごちゃっと置いてあるのもそのままだ。そして、それを片付ける定年を過ぎたボランティアのおじさんまでちゃんと佇んでいた。
「ふぅん、こんな所に住んでたんだな」
カヲルが物珍しそうに周りを眺めていた。数日前に知り合ったばかりのカヲルに実家近辺の風景を見られるのは、なんだか恥ずかしい気もする。
「駅は最近建て替えられたのか？」
「うん。私が小さい頃はもっとボロボロの駅だったよ。近くにビール工場なんかあったりして……」
そう言うと、この間、冬に帰省した時とは少し風景が違う事に気がついた。駅前はまだ若干工事中で、コンビニが入っているテナントは新築のにおいがした。
あ、と声をあげる。
コンビニから『薫』が出てきたのだ。学生服を着ている。高校の制服だ。
今はばっさりと切ってしまった髪の毛がまだ長い。

これは高校時代の駅前なんだ――――――。

高校生の薫は、コンビニの中へ笑顔で手を振っている。そうだ、この頃、ここで友だちがバイトをしていたのだ。そして『薫』は家の方向へ歩いて行く。
それを見届けたカヲルはついてこい、というように顎をあげた。
「後をつけるぞ」
「わかった」
薫とカヲルが『薫』を追いかけるという奇妙な構図が出来上がった。

4

高校生の薫は帰り道で挙動不審な歩き方をしている。
特に後ろを何度も振り返るのだ。
「おまえ、何を気にして歩いていたんだ？」
カヲルが不審そうに薫に聞いた。薫は思い当たる事を一つ言った。
「高校生の頃、ストーカーにあっていたの。無言電話は続くし、誰かにつけられているような気がしたり……」
「思い込みが激しい……訳ではないようだな」
そうカヲルが後ろを振り返りながら、言った。電信柱に黒い人影が見える。顔は見えない。
「おまえが顔を見ていないから、影としか写らないんだ」
はっきり見てたら今回の犯人のヒントになったかもしれないのに、と舌打ちまじりにカヲルは言った。
その態度に薫はむっとしたが、黙っていた。しかたない。本当の事だ。
「でも、姿が見えたらストーカーにならないじゃない」
せめての反論だ。
「それだったら、犯人を捕まえるとかすればよかったじゃないか」
うっ、と薫は詰まってしまった。確かに。私が最終的に選んだ行動は『東京へ引っ越す』というだけだった。逃げたのだ。結局。
そう言い合っているうちに『薫』は家に着いた。そして当然のようにカヲルも家の中に入ろうとする。
「入るの？」

「当たり前だろう」
やっぱり、他人が実家に勝手に入るのは抵抗がある……が、しかたないか……。
カヲルは見知った家のように家の中に入っていく。
夢の中とはいえ、なんて図々しいんだなんて考えてみたが、たぶん現実でも図々しいんだろうな。と思い直した。そしたら急に笑えてきた。
カヲルの行動を見ていたらなんとなく、落ち着いた。あまりにも図々しいし、堂々としているから、薫も堂々としていられる。たぶん一人だったら、きょろきょろと怯えながら動いていたに違いない。カヲルの存在に改めて感謝した。
外はすでに真っ暗になっている。食卓では母と薫が夕食を取っていた。
学校での話。たわいもない話を二人は交わしながら食事を取っている。懐かしいな。たった数年前なのに。
カヲルはその姿を確認した後、部屋の窓から外を眺めた。ひとつひとつの部屋から確認していく。そして、一つの扉に行き着いた。
「あー！　そこは私の部屋！！」
バッとカヲルを押しのけ、ドアの前に立ちふさがった。これはちょっと、いやかなり緊急事態だ。
「何してるんだよ。どいてくれ」
ぶすっとした顔でカヲルは言った。
「どうせ見られても大したことないだろ」
「そうは、言ってもね、これはね、ちょっ……と覚悟がいるのよ」
一言一言区切りながら言った。冷や汗だらだらだ。部屋がどういう状況なのか掴めない以上、恐ろしくて中に入れるなんて出来ない。
「先に、私が覗いてからでも良い？」
しょうがないな、と言う言葉を聞くより先に薫は顔だけ部屋へ突っ込んだ。
……洗濯物は無いな、服もちゃんと整理されている。うん、部屋

は予想より十分綺麗だ。
大きくため息をつくと、大きくドアを開き「どうぞ」と薫は言った。
その行動がどうしても理解できないカヲルは眉を潜めたが、何も言わず中へ入る。そして二つある部屋の窓のうちひとつで何かを見つけたらしく、薫を呼び寄せた。
家の近くの駐車場にあの影がいた。こっちを見ている。
顔が見えないはずなのに、なんだかにやりと笑っている気がする。
薫はぞっとしてその姿から顔を背けた。
「ああやって、あんたを観察していたんだろうな」
「え？」
「今回の犯人だよ。たぶん。あんたが記憶を取り戻すか、つぶさに観察していたんだろうな」
犯人は常に私を見ていた……？
背筋に悪寒が走る。鳥肌まで立ってきた。薫は身を固くしてその場に座り込んでしまった。
なんて気持ちの悪い事だろう。ただでさえ他人に監視されるというのは気味が悪いのに、その犯人は悪意をもって薫を見ていたのだ。
カタカタと身体が震える。
その姿を見たカヲルは、優しく肩を叩いた。
「大丈夫だ」
それだけ言った。
「落ち着いたか？」
ベットを背もたれ代わりに座ってカヲルは薫が落ち着くのを待っていた。同じように横に座っていた薫は声にならない声でうん、と

言った。
「犯人はいったいどんなことをしたんだろ？」
こんな執拗につきまとい、薫を見張らなければならないほどのこと……。いくら考えても、自分の記憶の中では見当たらない。そして今回、襲ってきた理由も。
「今のところは何も言えないな」
カヲルも髪をガリガリ掻きながら唸るように答えた。
「まあ、記憶をもっと遡っていけばわかるだろ」
そう言って立ち上がった。薫も血の気が引いてるが、つられて立ち上がった。
それを見たカヲルは、少し考えてから、薫の頭を両手で鷲掴みにし、顔を近くに寄せた。
「大丈夫だ。俺がここにいる。お前は何も考えないでついてこい」
いきなりカヲルのアップの顔が薫を仰天させた。顔が真っ赤になる。下がっていた血の気が、一気に上昇する。もう、言葉は全く聞こえない。うろたえた薫は手足をバタバタさせるだけで、一杯いっぱいだった。
「わわわ、わかりました！」
吃るのは仕方が無い。薫はこういう行動に免疫が無い。
その言葉を聞いて、やっと手を離したカヲルはいつもの笑いを浮かべ、部屋のノブに手をかけた。
「そうそう、そうやって大人しく、ついてくればいいんだよ」
人をからかって笑っている。なんて奴だ！
薫はさっきまでの恐ろしいという気持ちも吹っ飛び、息巻いてカヲルの後に続いた。

5

部屋のドアを開けると、また場所が変わっていた。

今度は中学校だ。さらに幼くなった『薫』がそこにいる。

友だちとの会話、部活に勤しむ姿。憧れの人を眺めている『薫』どこにでもいる中学生だ。

ここは特に何もない様だとカヲルは言い、そこらの学習机のイスに座る。

「そういえば、おまえ、父親はどうした？」

ズキリと薫の心臓が痛む。今までの景色の中、父親は一度も出てこなかった。

「お父さんは、私が小さい時に病気で亡くなったって、お母さんから聞いた」

薫には父親の記憶がない。いつも姉妹のように仲が良かった母親だけだ。母親は気付いたときから働いていた。いつも元気で明るい母。

だけど薫は知っていた。夜遅く一人で泣いていた母の姿を。

カヲルはふぅん、と曖昧な返事を返しただけだ。そして何か考える仕草。

「代わりにタカおじさんが、遊びに来てくれたけどね」

父の従兄弟だというタカおじさんは、母子家庭の薫達を心配してよく遊びにきた。

ちょうど良い母の茶飲み友達だった。

「もう一つ。この記憶の中、少し変なんだよ」

続けてカヲルは言った。普通ならば潜在意識の中にはもっと嫌な記憶も混じっているはずだと。恥ずかしい、悲しい、辛い、そんな忘れてしまいたい記憶が。

その記憶がすっぱり抜け落ちている、ということらしい。

「確かに、なんでなんだろ」
そういえば薫自身、そんなに恥ずかしい記憶など思い浮かばない。自分で言うのもなんだが、性格はとろくさい方だ。恥ずかしい記憶など、山のように浮かんできそうなものなのに。
「なにか、あるんだろうな」
カヲルが片肘をついて考え込む。遠くで吹奏楽部のラッパの音が聞こえてくる。グラウンドからはサッカー部のにぎやかな声。
まるで中学生に戻った様だ。中学生の時の放課後……。
薫は正面で考え込んでいるカヲルの顔をじっと見た。整った眉毛に長い睫毛、切れ長の眼。鼻筋は綺麗に伸びていて、顎がシャープだ。
ぼうっと見ている薫に気付き、カヲルは眉をひそませてこっちを睨んだ。
「おまえも少しは考えろ。行動もとろくさいが頭の中までスローペースなのか？」
……この口さえなければ、カッコイイのに！！
ちょっと見とれてしまった自分が悔しい。薫は立ち上がると教室のドアに向かった。
「ここには何もないんでしょ！　次に行こうよ、次！」
そして教室の使い込まれたドアに手をかけた。
ドアが開いた。

子供の泣き声が聞こえる。
和室に子供用の布団が引いてあり、そこで小学生の低学年の女の子が泣いていた。

『薫』だった。
ひたすらに泣きじゃくっていたようで声が裏返っている。
風邪だったのだろうか、布団の隣には氷枕が転がっていた。母はどこにもいない。別室にでもいるのだろうか。
カヲルは小さい『薫』の横にかがみ込み、初めて夢の中の人物に声をかけた。
「どうしたんだい」
やさしい声だった。あのカヲルから発せられた声とは思えなかった。
泣きじゃくっていた女の子は、びくりと身体を仰け反らせ、顔をあげた。じっとカヲルを見ている。カヲルもその視線から逸らそうとはしなかった。
「おにいちゃん、だあれ？」
突然現れた男の人だが、さっきの眼差しから悪い人とは思わなかったのだろう。小さい『薫』は警戒心を解いた。
「薫ちゃんの怖いものから助けてあげるよ。どうして泣いていたんだい？」
『薫』はもじもじさせながら、言った。
「こわいゆめを見るの。くらいところを走っているの。うしろからこわい人がきてね、かおるはね、つかまりそうになるの」
今、また思い出したかのように顔が引きつる。そんな『薫』の頭を撫でながらカヲルはさらに優しい声で『薫』に諭す。
「でもね、その夢には助けてくれる子がいるだろう？」
『薫』の顔がぱぁっと明るくなった。そして、うん、と頷き、瞳をきらきらさせた。
「そう！　たすけてくれる子がいるの！　どうしてお兄ちゃん知ってるの？　その子はね、お名前ね……」
小さい頭をうんうん唸らせて、一生懸命思い出そうとした。だがどうしても出てこないらしく頭を抱えた。
「お名前、しってるはずなんだけど……」

「無理して思い出す必要はないよ。大丈夫、その子が守ってくれるから」
襖が開いた。母だ。急に熱を出した『薫』の為に買い物をしてきたらしい。両手にスーパーの袋を下げている。
「薫ちゃん、大丈夫？」
母には薫とカヲルは見えていないようだ。カヲルはすっと立ち上がると、薫の元に戻ってきた。
「うん、だいじょうぶ。ママ」
さっきまでの泣き顔が嘘の様だ。にこにこした顔で母が来るのを待っている。
「ゆうれいのお兄ちゃんとお話をしていたの」
そう言ってカヲルの方に手を振る。カヲルは幽霊と言われたのが心外だったようだが、苦笑いをしながら軽く手を振った。
母はきょとん、として『薫』を抱きしめた。
「また怖い夢を見たの？　幽霊のお兄ちゃんが出てくる夢？」
『薫』は頬をぷーっと膨らませる。
「ちがうよ！　はしってるゆめ。いつもの、怖いゆめ。でね、ないていたら、ゆうれいのお兄ちゃんが出てきて、こわくないよって言ってくれたの」
一生懸命説明しているが、子供の説明ではやはり理解が難しいようだ。母は頑張って考えたみたいだが、結局諦めたらしい。『薫』に向き直り言った。
「そっか、怖い夢を見たのね。じゃあ、怖い夢は心の中の箱に閉まっちゃおう」
薫は固まった。どきんどきん、と心臓の音がカヲルまで聞こえそうだ。何かが引っ掛かる。頭の細胞をくまなく何かが巡っていくような、そんな感覚。

心の中の箱……。

向こうでは母と小さい薫がなにかやり取りをしているが、耳に入ってこない。

思い出した。そうだ。心の中の箱だ！

「思い出した！　私、怖い事や嫌な事があると、心の中に箱を作って、その中に閉まい込むクセがあったの！　思い出した！」

慌ててカヲルに説明する。落ち着くようにとカヲルは言うが、落ち着いていられない。その中に閉まい込んだ！　私の中の記憶。いつの間に忘れてしまったのだろう。

「その箱を探し出さないとな」

カヲルは言った。

「どうやって？　私の心の中の架空の箱よ。存在してないのに」

カヲルは心底バカにした顔をした。

「ここはおまえの心の中だ。架空でもここでは存在する。思い出せ、おまえならその秘密の箱をどこへ隠す？」

そこまでバカにしたような顔をしなくったって……。

いや、それ所ではない。私が秘密を隠そうとするなら……、何処？

それから二人で探しまわった。学習机の引き出しの中、戸棚の引き出し、押し入れの中。ありとあらゆる所を探しまわったが、見つからない。

「見当たらないな」

ため息まじりにカヲルが言った。薫もため息をつく。小さな子供が隠す場所など限られているはずなのに。

向こうで母が小さい薫に絵本を読んでいる。私のお気に入りの絵本だった。内容までは覚えていないが、確か、男の子たちが宝箱を木の下に埋めているシーンがあったことは記憶にある。この家はマンションで大きな木が無かった。それを小さかった私はすごく羨ましく思っていなかっただろうか。

薫は顔を上げ、ベランダへ向かった。そこは母の趣味のガーデニングという名の森だった。
その一番大きな鑑賞用の木の下を、そっと掘ってみる。少しもしないうちに固い何かに当たった。
「あった……」
薫と後ろで様子を見ていたカヲルは顔を見合わせた。
それは手のひらに乗るほどの大きさの、宝箱の形をしたブリキの缶だった。

4　パンドラの箱の夢

1

「まさしくパンドラの箱だな」
　薫の家から出てきて、マンションの前にある広場の方に移動した二人は近くのベンチに腰をかけていた。
　ギリシャ神話のゼウスがパンドラに持たせた、あらゆる災いの詰まった箱。彼女が好奇心から開けたところ、すべての災いが地上に飛び出したが、急いで蓋をしたので希望だけが残ったという……。あの箱に例えてカヲルは言った。
　だが、確かにそうなのだ。この中には薫の今までの負の感情が、詰まっているのだから。この奥には何があるのだろう？　神話のパンドラの箱のように希望も最後に残っているのだろうか。
　薫はぎゅっと箱をにぎりしめた。
「でも、この中に私の記憶が眠っているのよね。それなら開けないと」
　正直、怖い。でも、この世界から抜け出し、現実に戻る為には開けなければいけない。一体なにが出てくるのだろうか。
　微かに震えている薫を眺め見て、カヲルは少し笑いながら言った。
「開けるの、止めるか」
　驚いた薫はカヲルを見上げた。いつもの笑いだった。
「このまま現実に戻らずにここで遊んでいるのもいいもんだろ。現実に戻れば、またこの箱を作らなくてはいけないくらいの辛い出来事にも出会うだろうしな」
　彼なりの優しさだ。いじわるな子の精一杯の優しさだ。
　薫は笑って首を振った。
「大丈夫。もう私も大人だよ。こんな箱が無くたって生きていける

よ。それとも、何？　私の精神年齢がまだまださっきの小学生くらいって言いたいの？」
思いも寄らない薫の反論に驚いたようだ。苦笑しながら「そうかもな」と言った。

薫は息をのみ、手元の小さなブリキの缶の蓋に手をかける。

パンドラの箱を今、開ける。

2

出てきたのは、黒い液状の塊だった。それも風船のようにだんだん大きく膨れ上がっていく。それは家一件分くらいに大きくなると、突然弾けた。
大きな波となって、薫とカヲルに襲いかかってきた。
薫はそれに飲み込まれた。途端、様々な負の感情が身体の中に流れ込んでくる。
恐怖、悲しみ、恥ずかしい気持ち。そして憎しみ。
小学生の自分がいる。先生に名指しで怒られて恥ずかしい気持ち。中学生の薫は先輩にいじめられて毎日泣いていた。その先輩への憎しみ。友だちを疎ましく思う気持ち。高校生の薫は仲間はずれにされていた、そんな悲しみ。自分自身へのコンプレックス。もう少し、あの子みたいになれたら。嫉妬の気持ち。

ぐるぐる、ぐるぐる。

負の感情だらけで吐きそうだ。こんなにも私は醜い感情を持っていたんだ。もう、自分が嫌になる――――――。

「大丈夫か！」
カヲルの声にはっとなった。
カヲルは広場の滑り台の上に立っていた。そして薫もそこに引き上げられる。周りは一面、黒い海になっていた。マンションの一階が埋まってしまうぐらいの大きな波が飛沫をあげている。
「まったく。……たいしたもんだよ」
カヲルが息をついた。薫も力が抜けてその場に座り込む。手にはパンドラの箱を握りしめたままだ。
「自分が、嫌い、に、なりそうだった」
ぼろぼろと涙が出てきた。止まらない。この海の水を流し去るように涙が止まらない。薫は大きな声で泣き出した。
「……これだけ溜め込んで大変だったろ」
カヲルが負の海を眺め、言った。そして薫の頭を優しく撫でた。

箱はまだ薫の手の中にあった。
そして薫の記憶も戻ってはいない。
「まだ、中に何かあるの…？」
神話では最後に希望が残っていたのだが、この中には何が残っているのだろうか。
薫は周りを見渡した。明るかった空も暗く淀んでおり、負の海もそのままだ。
あの小さな薫は大丈夫だったのだろうか。

もはや、この箱に賭けるしかない。
再び薫は箱を開ける。
今度は何も出てはこなかった。だが、底にあったのは小さな小さな扉だった。まだ、この箱の底には何かがある？

薫は小さなノブに手をかけた。だが、予想に反してカヲルがその腕を押さえる。
「本当に、いいのか？」
いつになく真剣な眼差しを投げかけてきた。
「この底には、さっきとは比べ物にならないくらいのモノがある」
彼は何を知っているのだろうか。
そういえば、カヲルはいつも知ったふうな態度を取っていた。てっきり、私の心を読み取ったかと思っていたが、違う様だ。
本当は疲れ果てていた。もう、ここで立ち止まってしまいたかった。記憶なんてどうでもいい、という気持ちもある。
でも、現実に戻らなければ。お母さんがきっと泣いているよ。独りぼっちにさせてしまう……。
それにカヲルとの関係も知りたかった。きっと夢ではないどこかで会っているんだ。夢じゃなく、現実の彼にちゃんと会いたい。
ノブにかけている手に力が入る。
「今まで、一緒に付き合ってくれてありがとう。でも、私がんばるよ。現実で、また会おう？」
掴んでいた腕をカヲルは離した。そして両手を挙げ、参った、というような表情をする。
「わかった。……但し、俺も一緒に入る」
薫は頷いた。にっこりカヲルを見て微笑む。
ノブが回された。

3

桜が燃えていた。

みっしりと花をつけている桜が燃えている。
それが炎の灰とまじりあって、一気に花びらを舞い上げているように見えた。
……あれは、高松町でみた桜だ。
桜の後ろには今は空き地になった場所に家が建っていた。その家が燃えているのだ。沈んでいく太陽の夕焼けと、炎と、桜で、不可思議な美しささえ感じた。

そして、『私』はそれを見ている。

切れ切れの意識が脳裏によぎる。
ブツリと違う意識が入り込んできた。

薫は走っている。
おもちゃのブロックを掻き分けながら。
呼吸ができない。涙と、恐怖で。
目の前には男の子が薫の手を引いている。
後ろには恐ろしい何かが追いかけてくる。

また、意識にノイズが入り込んだ。

とめどなく流れる赤い液体。その液体は倒れている塊から流れているらしい。

違う薫が叫んでいた。
『パパ！！』

薫は見てしまったのだ。

それは血だまりに倒れた父だったのだ。
そして、その足元に佇む人物。返り血を浴びて、鬼のような形相をしている。
だが、わかる。
目元がそのままだ。髪型が変わっているが輪郭もそのままだ。
十五年近く経って老けてしまっているが、今もあの顎の黒子は同じ所にある。
あれは、あれは……！
「タカおじさん！！」

意識が回転をはじめる。
私たちはかくれんぼをしていた。私は居間のソファの後ろに隠れたのだ。そうしたら、パパ達のもみ合う声が聞こえた。だからびっくりしてソファからこっそりと覗き込んだ。そして、見てしまった。

――――パパの姿を。

そして、その相手を。
相手は薫に気付き、ナイフを振りかざした。
呆然としていただけの薫は後ろから手を引っ張られた。

走る。走る。

色とりどりのブロックを掻き分け、走っている。
涙と恐怖とで呼吸が出来ない。
「はやく！　にげるんだっ」
男の子が振り返る。切れ長の目、くせのある髪の毛。
「まっ…て、かをるちゃん……」
相手は薫たちを諦め、キッチンへ行った。
そして、何かが燃えはじめる。それは勢いを増し、急速に燃え広がっていった。外に出た時はすでに家は燃え上がっていた。
桜の木が燃えている。
薫が大好きだった桜の木だ。
カヲルと。そしてパパと木登りをよくした、あの桜の木が燃えている。

薫は絶叫した。
どっちの叫びだったろう。
幼い薫か、今、この記憶をみている薫か。
それとも二人ともか。

身体が強い力で引っ張られた。

4

薫の身体は何かの力によって急激に浮上していった。
そうだ。あの後お母さんの姿を見つけ、安心して私は倒れたの

だ。だけども、見た光景があまりにも恐ろしくて記憶を封印してしまった。母は薫は何も見ていないと……いや、見てしまっていたとしてもそのまま忘れさせたくて何も聞かなかった。
それを利用して、おじさんは何事も無く過ごしてきた。
ただ、目撃者である薫を観察しながら。
小学生の薫がいる。ブランコに乗り、背中を押しているのはタカおじさんだった。
どうして？　タカおじさんが？　……おじさんの目はハイエナの様だった。
さらに薫は浮上する。
中学生時代の薫がいた。
部活から帰ってきた薫を迎えにきてくれたのも、タカおじさんだった。

どうして？　どうして？

こうやって、私はタカおじさんに観察されてきたのだ。
記憶を取り戻さない様に。
要らない事を言わない様に。
高校時代の薫が現れた。ストーカーに怯えている薫が写る。この頃は、もう、おじさんとはあまり会話が無くなっていた。……だから！
ストーカーの影がおじさんの姿に変化した。
あれもそうだったなんて！

顔を手で覆ってみたが、それでもおじさんの姿は見えてしまう。
建物の影から薫を見つめている。
肉食獣のような顔のおじさん。
でも、どうして今頃？
こんな事が無ければ思い出さなかったのに！

自問自答しながら、薫は気付いた。
言ったではないか。電話で。
『私、高松町に住んでいた事がある？』と。
――――あれが決定的だったのだ。
おじさんはそこで記憶を取り戻しかけていると思ったのだ。そして、即行動を起こした。情も無く、自分の保身に行動を起こし、薫を襲った。
ああ、思い出してしまった！
薫は叫びながら暗く藍色の世界を突き抜けていった。

5　覚めない夢

1

薫は目を開いた。
夢の中の、ではない。現実の目が開いた。
そこには、予測されていた光景が映し出されていた。
傍らにタカおじさん。そして、その手にはナイフが握られている。……やっぱり、本当の事だったんだ。私、殺されるんだな。と、薫は他人事の様にそれを見た。
だが、タカおじさんはナイフを振り上げたまま、動かなかった。
動かなかったのではない。
動けなかったのだ。

その後ろでカヲルがおじさんの腕をしっかり握りしめていたからだ。
「今度は離さねーよ」
不敵の笑みでカヲルは言った。
タカおじさんの背中で反対の腕を羽交い締めにしている。ちっとも強そうに見えないカヲルだが、　意外と力があるらしい。おじさんは全く抵抗ができないでいた。
「現行犯だな」
そう言うと、病室のドアが開いた。そこには警察が待ち構えていた。現行犯では逃げる事が出来ない。おじさんは素直に警察に捕まると、連行される際に薫のほうを見た。
それは憎しみの顔ではなく、なんとなく悲しげに見えた。
……気のせいかもしれないけれど。
これでどんな結果だったとしても、薫もおじさんも解放される

のだ。
「よう」
カヲルは軽く声をかけ、折りたたみのイスに座った。
「元気か？」
どこをどう見たら、目が覚めたばかりに殺されかかった人間が元気でいれるのか不思議だったが、その軽さが薫の気持ちを少し楽にした。
「……本当に、あの時、助けてくれてたんだね」
ぽそりと言うと、カヲルは少し照れたように頭を掻いた。
改めて白い天井と病院の固いベット、そして頭に巻かれている包帯に気がついた。現実に戻ってきたんだな。
だが心の旅の影響か、薫はここがまだ夢の続きのような気がする。
鮮明に、閉ざしていた心の中の映像が思い出される。
「私は、お父さんを殺した犯人を……」
その後は言葉にならなかった。
記憶が無かったとはいえ、私は犯人を野放しにしていたんだ。それどころか、おじさんと言って懐いていた。
悔しいのか、悲しいのか、そして裏切られたという気持ちなのか、わからない。複雑に絡まった心が痛んだ。薫は両手で顔を覆い、静かに泣いた。そして、それをカヲルはじっと見ている。
優しい目だった。
まるで、小さい薫に話しかけた時の様に。
そしてゆっくりと薫の頭に手をかけ、囁くように言った。
「おまえのせいじゃない。気にするな。……とは無理かもしれないが、おまえは心の旅で強くなった。きっと乗り越えられる」
薫はカヲルを見つめた。カヲルもじっと見ている。
互いがゆっくり目を合わせたのは初めてかもしれない。
そして、カヲルが薫の耳元に顔を寄せ、何かを言おうとした時。
ドアが突然開いた。

そこには呆然と立ち尽くした母が立っていた。
「薫ちゃん？」
母は立ち呆けていたが、一瞬で我に返り、走りながら病室に入ってくる。
ぼろぼろと母の両目から涙が溢れてきた。
「薫ちゃん！　目を覚ましたのね！」
そして、カヲルを押しのけ薫に抱きついた。
ああ、お母さんだ。お母さんのぬくもりだ。ゆっくりと母にもたれ掛かる。このぬくもりの為に私は帰ってきんだ。
「薫ちゃん、薫ちゃん……」
母は何度も薫の名前を呼んだ。
「ただいま。お母さん」
薫は笑顔でそれが言えた。
カヲルは少し苦笑いする。そしてイスから立ち上がり「じゃあな」と軽く言って病室を出た。まるで、明日にはまた会えるさ。という顔で。
だが、それがカヲルを見た最後だった。

2

あの後、数日様子を見て、精密検査を受け、何も問題がないとわかると薫はすぐ退院する事が出来た。
今は母と、父の墓参りに来ている。
「お父さん、犯人やっと捕まったよ」
母が瞳を潤ませながら、父の墓標に報告した。
犯人は意外とすぐに罪を認めた。
実は父の従兄弟とは嘘だった。従兄弟と顔が似ているだけの他

人だったのだ。そして疎遠だった父に従兄弟として顔を出し、借金の申し込みをした。
その時は、本当は殺すつもりなど無かったのかもしれない。だが、父に借金を断られ、頭に血が上り犯行に至ったと言う話だったという。
それを薫は見ていたのだ。
薫が記憶を失っていると知ると、再び叔父として顔をだした。薫を見張る為に。
母は事件の時、ちょうど外出していて犯人の顔を知らなかった。家に戻ると火の海の家と、放心状態の薫を見つけたのだ。母の心労はよほどのものだったろう。捕まらない犯人、記憶を失っている娘。その娘から無理矢理、真相を聞こうとはしなかった。恐ろしい出来事を思い出させたくなかった。
ただ、遠くへ引っ越した。事件を知らない土地へと。
凶器も見つかった。
なぜなら父を刺したナイフと薫を襲ったナイフは同じものだったから。
ナイフには父のＤＮＡがはっきりと残っていた。決定的だ。父が伝えたがったのかもしれない。
結局、犯人が薫を襲わなかったら、このまま事件は解決しなかったのかもしれない。
思い出したとしていても、今考えると幼かった薫の証言を警察は信用したか微妙なものだったろう。皮肉な事件だった。

帰り道、母といろんな話をした。
お父さんとの思い出を。薫はパパっ子だったようで、父から全然離れなかった事、パパと結婚すると言っていた事などや、桜の木にブランコをつけてもらった事。
今まで忘れていた分を取り戻すかのように、いろんな話を聞いた。

母も嬉しそうにそれを話した。

途中、あの空き地を通る。かつてあった我が家。そして桜の木。桜は満開を過ぎたようで、あの焼け残った枝に緑の葉を茂らせている。まるで何もなかったかのように桜は佇んでいた。

母は何も言わなかったが、あの惨劇を思い出しているに違いない。うっすらと涙を浮かべながら、そっと桜の木に触れていた。

全てが始まり、終わったこの場所。

「そういえば、あの子がカヲルくんだったのね」

思い出したように、母は言った。

「あなたたち、本当に仲が良かったのよ。事件の後、すぐに引っ越しちゃったから、あれきりだったけど、こんな形で再会するなんて、あるのねぇ」

『再会』　あれは再会なんかじゃない。ずっとカヲルは薫を守ってくれていたのだ。

なのに、そのカヲルはあれきり姿を見る事はなかった。

学校の構内中を探しまわり、もちろんあの準備室にも行った。しかし彼は居なかった。

今まで居たかのようにイスが投げ出されてあり、あの時薫が取り上げた本もそのままの形で残っていた。そっとイスに触れてみたが、冷たかった。

最終的に人事課にいって調べてみたら、なんと休学届けが出されていた。

もう、カヲルには会えないのだろうか。

ううん、と首を振った。

きっと、また、会える。

ここで会えなくても、夢の狭間できっと会える。そしてあのけだるい目で人をバカにしたような笑いを浮かべて待ってくれているはず。薫は確信していた。

会いにいこう。あの狭間へ。

薫は空を見上げた。
夕暮れ時はもう過ぎて、夜の闇が支配しようとしている。
夕焼けの赤い空から次第に変わる藍い空。星はまだ輝きを得てはいない。
独特の空。
まるで、深い海の底にいるようだ。と薫は思った。

そう、ここは海の底。
そして私はその海を泳ぐ深海魚みたい。
「お母さん、帰ろうか」
そう言うと母と二人、ゆっくりと歩き出した。

＜了＞

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7802s/

深　海　魚

2011年5月5日22時44分発行